

「ポストにこれが届いていた」の為のメモ書き

ポストに届いていたのは鮮やかなピンク色の箱に入った4つづの高級チョコレート。同封されていたのは「観察の考察」と書かれた指示書だった。そこにはこう書いてある。

- 1、送付物をよく観察し、一旦忘れてください。
- 2、今度は視覚にたよらず、送付物を観察してください。
- 3、1と2の差を考察し、作品に反映してみてください。形式は問いません。

これに対する私の応答は、いかにして作品を考えるか。

送られてきたそのものをよく観てみる。箱の中には DEMEL というウィーン生まれだということが分かるお菓子の紹介文が添えられていた。そこにはこう書いてある。

” お菓子の都ウィーンが誇る至高の味

デメルは、かの神聖ローマ帝国を統治したハプスブルク家の紋章を今日もなおそのブランドマークとさせていただいておりますように、王政時における王宮御用達菓子司としての栄誉と伝統をなによりも尊び、華麗で優雅なお菓子作りを200年の永きにわたり、驚嘆すべき厳格さをもって今日まで継承してまいりました。「デメルを訪れずしてウィーンを語るなかれ」。それはあまりにも有名な言葉です。ため息がもれるほどの美しさを秘めたたくさんの菓子。宝石箱にしてもすばらしいウィーン工房の天才アーティストによるパッケージ。目を見張るほどの装飾技術で構成された店内。いずれをとってみましても、ウィーンに生まれウィーンで成熟された総合芸術の結晶と申せます。”

私はチョコレートを食べてみる。とても美味しいチョコレートだった。視覚以外で観察とは、この香りと味を頼りに視覚以外での観察を始める。私はチョコレートが好きである。しかし、チョコレートを食べる3回に1回の割合で、カカオ農園で奴隷同然に働かされて、学校へ行くことも許されない子供達のことを思い出す。好きであるがゆえ、その記憶が色濃く残るのだろう。

私たちは、チョコレートの味を知っているから、この香りがチョコレートであると分かる。食べていなくても、舌にチョコレートの記憶を思い起こすことができる。初めて観察するものとして対岸するにはチョコレートを知り過ぎている。そして、無知である。

視覚に頼って観察することに戻ると、箱の上蓋にプリントされてあるものがハプスブルク家の紋章ということ、200年続く王宮菓子御用達菓子であることを知る。

そしてその鮮やかな箱が上の蓋であることに社会の構造を当てはめてみてしまうことになる。

送られてきたものの応答として、せめて自分の好きなチョコレート会社にカカオ農園の問題と提案を送ろう。それが応答だと思い、チョコレート会社とカカオ農園の問題の取り組みを調べることにした。しかし、その問題への取り組みが動き始めていることを知った。私が、追いついていないことを知る。日々の暮らしのなかで、ずっと気にかかっているけど何も行動していないことや、ふと思いつく憂鬱をともなったもの、それらは少なくないだろう。人のスピードよりも早く動く社会に、めい

いっばい生きている現代の人々は置き去りになる。わたしも、その一人だ。

そこから何をつくりだせば良いのだろうか。社会問題を扱うつもりはない。それに言及するような作品をつくりたくはないし、できない。

けれども無視もできない。観察の方法を変えることにした。まず、この鮮やかすぎるピンク色は扱い方がわからない。ひとまず、その色と生活してみることにした。色彩に制限がある私の部屋で、その色はあまりにも気にかかる存在だった。私は色に高さを感じてしまうので、そのピンク色はあまりにも手前にせり出すように主張した。2ヶ月程その色と暮らしたが、常に気にかかる存在と常に気にかかる問題が少しずつリンクし始めた。何か作品ができるかもしれないという僅かな予感があった。今回展示するある一室は部屋だ。私がいつも長く時間を過ごす部屋とドアや窓の配置が同じ位置にある。自分の部屋に入る導線とその一室の導線は似ている。その導線をなぞるようにして、自分の部屋にその箱があるという違和感を再現することにした。そして、考慮すべきことはポストにそれが届いたこと。人から直接受け取るでもない”郵便”は、例えば他の世界から届いたとしても、何故か説得力がある。理由は分からないが、ドラマや実話にもよくある死後に届く手紙というものがある。送り主がこの世にいても、郵便物さえ届けばその人を感じることができる気がする。サンタクロースを信じて疑わなかったことにも関係があるように思う。郵便さえあれば実在すると勘違いできる潤いを持っているのかもしれない。それを運ぶ郵便屋さんには何か特別なものを私は感じている。私がこの世界に向き合い作品をつくる時、見えないものを手に抱おうとすると、次元について考え始めることが術になっているのだが、郵便屋さんという存在は、次元を渡るようなことに似ているのかもしれないと思った。

title 「観察の考察の記録」

ものの次元を操作する。ずらしてゆく。アクリル板を持ち、部屋の一部を直にトレースする。視線も限定された位置で片目でものを見ると3次元を2次元に簡単に見ることができる。そうすることで、距離を計ることなくアクリル板に転写できると考えた。風景を切り取り一旦は目を離し、画面に向かうのとは違い、アクリル板の向こう側を見ながら描くことは直接風景を掴んでいるかのようだ。ほんもの目で見えているものは平べったいものかもしれない。一度平べったく色彩に置き換えたが、違う高さでみえてくる。展示会場には自分の部屋の断片を解体し、再構成するかたちで作品へと置き換えた。イメージを再現するのではなく、なるべく純粋に色彩と線で作品へと展開する。机には考察の地図。部屋の写真（まさに表層）で箱を包んで立体へ変換。壁にはハプスブルク家が辿った滅亡までの歴史。滅亡の本当の理由は血族結婚を繰り返し、富を増やそうとした策に原因があるようだ。それをA4に書き、紙の終わりごとハプスブルクの滅亡を揃え、歴史という時間（4次元）を一旦、文字（2次元）にし、読み終わる頃に3次元（A4の紙）へと置き換えることを考えた。

チョコレートでコーティングした箱の下部分を鏡の上へ置く。簡単に逆転できる方法。上の蓋ができあがる。チョコレートを知っている私たちは、その味を思い出すことができる。匂いまで感じることができるのかもしれない。見ようとしたら見えないものを観察してしまう。これが指示書に書いてあった「観察」の差異を探る糸口になるのかもしれないと考えた。

